

令和元年6月18日現在

機関番号：34416

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K02865

研究課題名(和文) コミュニケーション能力指標に基づく文型リスト構築・共有資源化と中国語教育の再設計

研究課題名(英文) Development and sharing of language resources based on the indications for communicative competence described in "Foreign Language Curriculum Guidelines"

研究代表者

山崎 直樹 (Yamazaki, Naoki)

関西大学・外国語学部・教授

研究者番号：30230402

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：この研究の目的は、『外国語学習のめやす』のコミュニケーション能力指標に示された能力を育成する中国語教育を実現するために、この指標と言語形式とその運用を結びつけるための言語資源を開発することである。この言語資源は、コミュニケーション能力指標から導き出されたコミュニケーション・タスク、そのタスクの遂行が必要となる目標状況、また、どのような談話の一部となるかを想定した談話類型、言語表現の実例とそこから変項と定項を明示して帰納した文型、言語形式に関する注意事項、そして、その目標状況で必要となる方略的言語使用・語用論的慣習社会言語学的観点に関する情報を豊富に含んでいる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

われわれの言語資源は単なる文型リストではない。言語使用の目標となる状況、遂行すべきタスク、談話類型(儀礼的発話なのか、構造化不要のリストアップ的発話なのか、実質的行動のための先行連鎖なのか……)に関する情報、そして、目標状況で必要となる方略的言語使用・語用論的慣習・社会言語学的観点についても、場面、目的、相手との関係に言及して情報を提供している。これによって、コミュニケーション能力の育成を目標とする中国語教育における出発点から到着点に至るまでの道筋(=言語形式から出発して現実的な言語運用に至る道筋)に必要な、豊富な情報を含んだ資源を、中国語教育従事者に提供できるはずである。

研究成果の概要(英文)：The goal of this research project is to develop language resources based on the indications for communicative competence described in "Foreign Language Curriculum Guidelines: A Proposal from Chinese and Korean Language Teachers" (The Japan Forum, 2012). This language resource is not just a sentence pattern list. This resource provides the following contents: 1) target situations of language use based on indications for communicative competence, 2) communicative tasks in each target situation, 3) discourse types of expected utterances in these tasks, 4) strategic language use, 5) pragmatic language practices, 6) sociolinguistic perspectives.

研究分野：言語教育学 / 中国語学

キーワード：外国語学習のめやす コミュニケーション能力指標 中国語教育のための言語資源 コミュニカティブなタスク 目標となる言語使用状況 語用論的慣習 社会言語学的観点 方略的言語使用

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

当研究組織は「コミュニケーション・ゴール」と「言語の形式と運用の知識」を結びつけるために「コミュニケーションのための文法」を確立することを目指し、その具体化の1つの方策として、「コミュニケーション能力指標に基づいた文型リストを含む言語資源」を構築した。その背景は以下のとおりである。

(1) Backward Design (逆向き設計) によるコミュニケーション能力を測る評価法をそれ

コミュニケーション・ゴールを最初に設定し、コミュニケーション能力を測る評価法をそれに合わせて定め、そこから授業・教材を設計していく **Backward Design** はすでに一般的になりつつある。このアプローチの代表的な例は『外国語学習のめやす：高等学校の中国語と韓国語教育からの提言』(TJF, 2012)(以下『めやす』)で推奨されている教材設計に見ることができる。『めやす』は15の話題領域における「**Can-do** 能力記述文で記述されたコミュニケーション能力指標」を提案している。本研究はこの能力指標をいかに中国語教育の現場に導入するかという観点から出発した。

(2) 中国語教育のための共有リソースの必要性

コミュニケーション能力指標から出発して授業・教材を設計しようとすると、次の2種類の恣意性が生まれる。1)「指標」(例：身近な人を紹介できる)に到達するためには、あるいは、到達したと評価するためには、最終的にどのようなタスクを目標にすればよいか(**Target task** の設定)と、その**Target task**に至るプロセスで、具体的にどのような教育的タスクを与えればよいか(**Pedagogical task** の設定)という判断が教師により異なる。2)そして、それらのタスクは、具体的にどのような言語表現に対応するかという判断が異なる。もちろん、中～上級者対象の学習では、言語形式の指定は、むしろ学習者の自由なコミュニケーションを妨げる可能性があり、賛否両論があるが、少なくとも入門期においては、タスクと言語形式の対応づけは重要な課題である。また、この恣意性は教師の能力の高低とも関係する。以上のことから、教師が共有できる言語表現のリソースが教育内容の標準化のために必要である。

(3) 言語形式に関する知識のほかに必要なもの

コミュニケーション能力を構成するものは、言語形式に関する知識のほかに、「方略的能力」「社会言語学的能力」などもあることが指摘されて久しい(例えば、**CEFR** などで指摘されている)。「コミュニケーション能力の育成」を教育目標に掲げる以上、これらの能力を体系的に導入する方法を考える必要がある。

2. 研究の目的

当研究組織は、前節で述べた課題を解決するために、「コミュニケーション文法のための文型リストを含む言語資源」を構築し、それを共有リソースとして世に問うことを目指した。この言語資源は、コミュニケーション能力を示した到達目標を、中国語の形式と運用に関する知識と結びつけ、その知識を教授者間で共有するためのものである。

この言語資源のうち、「文型リスト」の部分は、すでに当研究組織が2013～2015年度に受けた科研費補助金による研究活動の過程で完成させている。今期間の研究では、この文型リストで取りあげた言語形式の妥当性に対してネイティブ話者による検証を行うことを第1の目的とした。

さらに、第2の目的として、言語によるコミュニケーションに関わる包括的な情報を提供できる、新しいタイプの言語資源の構築を掲げた。これは、a)目標と考える言語使用状況(**Target situation**)を設定し、b)そこで行われることが想定されるコミュニケーションタスクを設定し、c)そのタスクに含まれる談話のタイプを類型化し、d)言語表現を例示し、e)そのタスク遂行において必要となる語彙選択のバリエーションを 変項 という形式で提示した文型を設定し、f)言語形式に関する知識を提供し、さらに、g)方略的言語運用・語用論的慣習・社会言語学的観点に関する明示的知識も同時に記述するという、新しいフォーマットによる言語資源である。

3. 研究の方法

以下の特徴を持つ言語資源を構築する作業を進めた。

(1) 逆向き設計による合理性がもたらす合目的性

これまでに各所で作成された初級者のための文型リストは、語彙と文法体系の基本的な部分を理解させるためのものであった。このようなリストは、たとえ、コミュニケーション能力の育成を目標に掲げていても、構造を出発点とした設計であるので、ゴールにとって最適な項目選択がされている保証はない。また、『旅行者のための基本表現100』というようなタイトルをもつ、文例だけを集めた表現集は、特定の用途のための文を暗記用に羅列したものが多く、また、そもそも「構造への理解」を促進する過程自体を欠いている。我々の目指したのはそのどちらでもない。我々の文型リストは、到達すべきコミュニケーション能力から逆向きに言語構造の知識を構築する設計に拠っている点で、合目的性を備え、言語構造への配慮を怠らない点で、学習者が習得目標言語の体系を習得する過程を支援するものとなっている。

(2) 目標状況の設定、コミュニケーションタスクの設定、談話タイプの設定

逆向き設計の利点を最大限に生かすべく、我々は、まず、コミュニケーション能力指標に示されたコミュニケーション能力が必要となる状況「目標状況 Target situation」を各指標ごとに設定した。この目標状況は、コミュニケーションが行われる場面、目的、参加者などの属性をできるだけ具体的に設定したものである(この設定は後述の(3)の情報提供ともリンクする)。そして、そこで遂行されることが想定されるコミュニケーションタスクも合わせて設定した。さらに、そこで要求される談話のタイプを下記のように4つの類型に分け、学習者に過大な負荷をかけないようにした。

4類型は以下のとおりである：[あいさつ行動][リスト型会話][スモールトーク][前実質行動]。このように分類した意図は、タスクの中で言語を使う目的が、単なるあいさつなのか、アンケート調査のような列挙型の質問なのか、友好関係の確認のための発話交換なのか、実質的な成果を得るための行動の前段階の発話なのかを規定しないと、必要とされる言語表現の幅(変異)と深さ(構造)を決定しにくいことによる。このように、[状況]>[タスク]>[談話タイプ]という順序の分析を行い、言語形式を選択しているため、逆向き設計の利点を最大限に生かした言語表現の選択が可能になっている。

(3) 方略的言語運用・語用論的慣習・社会言語学的観点への言及

我々の言語資源は、目標状況を出発点とし、コミュニケーションタスクの遂行のため、言語表現を選択していく。ゆえに、文型を設定する際、方略的言語運用(例：筆記具の有無を問うことにより貸してほしいと頼む)や語用論的慣習・社会言語学的観点(例：このような申し出を行うと、自分が食事代を負担することを申し出ていると解釈される可能性がある)に言及することは、むしろ必然的に必要になる。我々の言語資源は、すでに、前期間の成果でこれらを導入していたが、今回は、これら「方略的言語運用、語用論的慣習、社会言語学的観点」に関する知識をさらに体系的に、さらに豊富なものにするを図った。

(4) 複数地域のネイティブ話者による地域横断型検証

上記の(2)と(3)の遂行にあたっては、ネイティブ話者によるチェックも同時進行でおこなった。これは、前期間の文型リスト構築作業では不十分であった点でもある。

また、学習対象となる中国語(標準華語)の「複中心地型言語」的性格を鑑み、言語規範が異なる複数の社会(例：台湾および中国)の話者による検証を試み、中国語を学ぶ学習者が、どの地域に赴いても円滑なコミュニケーションが図れるよう、資源の選択に留意をした。

4. 研究成果

(1) 『めやす』コミュニケーション能力指標(レベル1)に基づく、文型リストを含む言語資源の完成

『めやす』の全15の話題領域に含まれるコミュニケーション能力指標(レベル1)の97条の指標に対して、それぞれに具体的な目標状況を設定し、300項近いのコミュニケーションタスクを設定し、そこから出発した入門期学習者向けの言語表現と方略的言語運用・語用論的慣習・社会言語学的観点に対する情報を提供する言語資源を完成させた。これらは順次、公式ウェブサイトで公開する予定である(形式の統一やウェブサイトの構築を手作業でおこなっているため、公開はまだ完了していない)。

(2) 関連領域の研究の深化

上述の活動と並行して、研究組織の各自が、この言語資源に言語学的・言語教育的基盤を与えるべく、中国語の習得過程、語用論的・社会言語学的研究、教授法、教材作成、カリキュラム策定などに関する研究を行い、論文として公刊した。

山崎(代表)は、プロジェクト型言語学習の最終ゴールから、授業内での言語形式の学習に至る道筋を可視化する「目標分解」の手法を提案し、各地でワークショップをおこなった。

鈴木は、初級学習者に必要な学習項目としての文型の選択に関する研究を継続的におこない、教育用文法の領域で学界に新しい提案をおこなった。

西は、交流型学習の実践を他言語の教師と共同でおこない、その成果を定期的に報告した。また、方略・語用論・社会言語学分野での研究もおこなった。

中西は、レアリア(生教材)を、中国語教育に生かす方法論を確立するために、中国語が使用される諸地域の各位相における言語使用について、実証的な研究をおこなった。

植村は、CLIL(Content-Language Integrated Learning)の観点から、言語形式の習得とコンテンツの学習のバランスを考察する研究をおこなった。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計17件)

(1) 山崎直樹, 「外国語学習のめやす」: 背景, 理念, 目標, 方法論, 『他者とつながる外国語教育をめざして』(田原憲和編, 三修社), 査読無, 2019, 6-35

- (2) 植村麻紀子, 教職課程の学生による「高校生対象中国語講座」の取り組み, 『2018年度言語メディア教育研究センター年報』, 査読無, 2019, 印刷中
- (3) 植村麻紀子, 「内容」と「思考」を重視する言語教育: 「めやす」と CLIL が志向するもの, 『他者とつながる外国語教育をめざして』(田原憲和編, 三修社), 査読無, 2019, 148-165
- (4) 山崎直樹, 「権威」の要らない言語学習の可能性: ICT と学習者オートノミー, 『漢字文献情報処理研究』, 査読有, 18号, 2018, 4-17
- (5) 鈴木慶夏, 学界展望, 『中国語学』, 査読有, 265号, 2018, 113-130
- (6) 中西千香, レアリアについて: その特徴と教育的価値, 『中国語教育のためのレアリア読本』, 査読無, 2018, 7-24
- (7) 中西千香, 実践例: スーパーのチラシから中国語を発見する: レアリア入手からワークシート作成・実践まで, 『中国語教育のためのレアリア読本』, 査読無, 2018, 135-144
- (8) 西香織, 李大年, プロジェクト学習を通じた学生の アクティブラーニングに対する意識調査分析, 『北九州市立大学外国語学部紀要』, 査読無, 147号, 2018, 19-47
- (9) 西香織, 鈴木慶夏, 中国語初中級における比較表現の文法事項分割・分散化試案, 『北九州市立大学 国際論集』, 査読無, 16号, 2018, 127-144
- (10) 植村麻紀子, 中華料理のレシピで学ぶ中国語, 『中国語教育のためのレアリア読本』, 査読無, 2018, 87-105
- (11) 植村麻紀子, 教室でレアリアをどう活用するか: 食品パッケージと料理のレシピを中心に, 『中国語教育のためのレアリア読本』, 査読無, 2018, 145-154
- (12) 植村麻紀子, 実践報告: 中国語教育における CLIL 活用の可能性: “中国留守児童” を題材に, 『中国語教育』, 査読有, 16号, 2018, 147-167
- (13) 植村麻紀子, 中国語授業における ICT 活用事例, 『2017年度言語メディア教育研究センター年報』(発行者: 神田外語大学), 査読無, 2018, 47-59
- (14) 西香織, 対話語体中模糊限制語“好像是(吧)”の語用機能浅析, 『杉村博文教授退休記念中国語学論文集』(白帝社), 査読無, 2017, 119-137
- (15) 西香織, 基於会話的日本漢語学習者理解型交際策略分析, 『世界漢語教学』, 査読有, 1号, 2017, 128-142
- (16) 鈴木慶夏, 中国語教育文法設計の必要性: バックワード・デザインによる中国語学的文法からの解放, 『杉村博文教授退休記念中国語学論文集』(白帝社), 査読無, 2017, 177-196
- (17) 植村麻紀子, (実践報告)「翻訳を通して中国理解を広げよう」プロジェクト, 神田外語大学紀要, 査読無, 29号, 2017, 319-341

[学会発表](計 38 件)

- (1) 山崎直樹, 多言語化した日本社会に対して言語教育従事者は何をすべきか, 母語・継承語・バイリンガル教育 (MHB) 研究大会事前学習会, 2019, キャンパスプラザ京都 (京都)
- (2) 山崎直樹, 『権威を持った教師』を必要としない外国語学習, 漢字文献情報処理研究会第 21 回大会, 2019, 関西大学千里山キャンパス (大阪)
- (3) 中西千香, 新学期までにできること: 教材研究から授業準備まで, STMC 第 8 回研究例会「新学期までにまだまだ間に合う! より充実した授業にするために」, 2019, 大阪産業大学梅田サテライトキャンパス (大阪)
- (4) 中西千香, レアリアを使って授業をすところなる, STMC 第 8 回研究例会「新学期までにまだまだ間に合う! より充実した授業にするために」, 2019, 大阪産業大学梅田サテライトキャンパス (大阪)
- (5) 西香織・阪堂千津子・池谷尚美, 「違和感」から始める多言語・多文化連繋プロジェクト: 多文化共生社会への参加に向けて, 第 17 回外国語授業実践フォーラム, 2019, 立命館大学東京キャンパス (東京)
- (6) 阪堂千津子・西香織・池谷尚美, 多言語連繋型プロジェクトワーク授業のデザイン: オリンピックを題材にした授業デザインの考察, 朝鮮語教育学会第 80 回例会, 2019, 近畿大学東大阪キャンパス (大阪)
- (7) 植村麻紀子, 目標からのバックワードデザインとその評価: 中国語教育における実践例をまじえて, 神奈川大学外国語科目教育学部主催ワークショップ「外国語科目を学び合う」, 2019, 神奈川大学横浜キャンパス (神奈川)
- (8) 植村麻紀子, 目標からのバックワードデザインとレアリアの効果的活用, 工学院大学孔子学院講師研修, 2019, 工学院大学孔子学院 (東京)
- (9) 澤邊裕子・植村麻紀子・中川正臣, 言語教育の実践者は「社会」をいかに捉えているか: 「めやす WEB」単元案の分析から, 第 17 回外国語授業実践フォーラム, 2019, 立命館大学東京キャンパス (東京)
- (10) 山崎直樹, 高大の接続を試みることの弊害, 高等学校中国語教育研究会全国大会, 2018, 関西大学千里山キャンパス (大阪)
- (11) 中西千香, レアリアの中の書面語表現とその特徴, 中国語教育学会第 2 回研究会『レアリアのツボ、レアリアのチカラ: レアリアで学ぶ、教える中国語のために: 第 5 弾』, 2018, 愛知大学名古屋キャンパス (名古屋)
- (12) 中西千香, レアリアの特徴とその教え方, 北陸大学孔子学院第 3 回中国語教授法研修会,

- 2018, 北陸大学山中町セミナーハウス (石川)
- (13) 中西千香, 魅力ある授業にするために: クラス経営、発音指導から文法指導まで:, 第 9 回 東日本漢語教師セミナー, 2018, 工学院大学孔子学院 (東京)
- (14) 西香織, 日本漢語学習者が在不同人際関係中的理解型交際策略研究, 第十屆亞太地區漢語教學學會國際研討會, 2018, 墾丁福華渡假飯店 (台湾・屏東)
- (15) 植村麻紀子, 中国語教育と CLIL, 日本 CLIL 教育学会 第 1 回大会シンポジウム, 2018, 早稲田大学戸山キャンパス (東京)
- (16) 植村麻紀子, (模擬授業) 料理のレシピを読んでみよう: レアリアでジグソー活動, 中国語教育学会 2018 年度第 2 回研究会中国語教育・学習に関するワークショップ: レアリアのツボ、レアリアのチカラ: レアリアで学ぶ、教える中国語のために, 2018, 愛知大学名古屋キャンパス (名古屋)
- (17) 植村麻紀子, 言語教育におけるユニバーサルデザイン化を考える, 言語文化教育研究学会月例会特別企画, 2018, 早稲田大学早稲田キャンパス (東京)
- (18) 山崎直樹, 教育における外国語教育の地位を確かなものにするために: 「つながる」中での成果物、21 世紀型スキル、複言語・複文化主義, 外国語教育に関わる研修会, 2017, 明治学院大学白金台キャンパス (東京)
- (19) 山崎直樹, 「交際能力指標」需要什么樣的語法與語用教學?, 第十八屆全國語言學論文研討會, 2017, 国立台湾師範大学 (台北)
- (20) 山崎直樹, 「外国語学習のめやす」に基づいた授業設計の特徴, 2017 年台湾日本語教育国際シンポジウム, 2017, 淡江大学 (台湾・新北)
- (21) 山崎直樹, 「外国語学習のめやす」とは, 「外国語学習のめやす」ワークショップ: 21 世紀型スキルを身につける授業について考えよう, 2017, 淡江大学驚声国際会議場 (台湾・新北)
- (22) 山崎直樹, 「外国語学習のめやす」とは何か, 淡江大学 FD, 2017, 淡江大学 (台湾・新北)
- (23) 山崎直樹, 「外国語学習のめやす」の 3×3+3 の概念を授業設計と評価にどう生かすか?, 淡江大学 FD, 2017, 淡江大学 (台湾・新北)
- (24) 中西千香, 「教科書を教える」からの脱却: 第二外国語、第一セメスターを例に, 中国語教育学会第一回研究会中国語教員、教員志望者のためのブラッシュアップ研修会「明日からの授業を少しでもよくするために」, 2017, 愛知大学名古屋校舎 (名古屋)
- (25) 中西千香, ルーブリック作成から学習者評価まで: 自己紹介動画課題を例に, 北陸大学主催第 2 回中国語教授法研修会, 2017, 北陸大学山中町セミナーハウス (石川)
- (26) 鈴木慶夏, “把”構文に必要な教育文法とは: 文法事項の分割・分散による文型化試案, 中国語教育学会第 15 回全国大会, 2017, 関西大学 (大阪)
- (27) 西香織, 初級レベルに必要な比較表現とは: 文法事項の分割・分散による文型化試案, 中国語教育学会第 15 回全国大会, 2017, 関西大学 (大阪)
- (28) 中川正臣、亀井みどり、植村麻紀子, 「参加型研究会」をいかに創り出していくか: 参加者の声をもとに活動内容を考える, 第 13 回外国語授業実践フォーラム第 11 回協働実践研究会, 2017, 早稲田大学早稲田キャンパス (東京)
- (29) 山崎直樹, 「外国語学習のめやす」とは何か?, 宮城学院女子大学日本文学科日本語教員養成課程開設 10 周年記念企画「日本語教育における「外国語学習のめやす」研修会」, 2016, 宮城学院女子大学 (仙台)
- (30) 山崎直樹, 21 世紀の子どもたちが必要とする全てが学べる外国語教育, 平成 28 年度和歌山県高等学校中国語教育研究会研究協議会, 2016, 和歌山県立橋本高等学校 (和歌山)
- (31) 鈴木慶夏, 第二外国語初級段階で最初に学習する“了”: 処方的アプローチによる導入形式の選択, 中国語教育学会第 14 回全国大会, 2016, 日本大学文理学部 (東京)
- (32) 鈴木慶夏, 在二語漢語教学中首先要学哪一種“了”? : 從日本學習者產出的中介語角度看, 漢語作為第二語言研究國際研討會, 2016, 中国華東師範大学 (上海)
- (33) 中西千香、荒川清秀、明木茂夫、塩山正純、植村麻紀子、干野真一, 中国語教育におけるレアリアの有用性: 『レアリア読本 (仮称)』作成に向けて, 日本中国語学会第 66 回全国大会, 2016, 立命館アジア太平洋大学 (大分)
- (34) 中西千香, 「レアリア俯瞰 - 全体像と活用法」, 中国語教育学会第 3 回研究会中国語教育・学習に関するワークショップ レアリアのツボ、レアリアのチカラ~レアリアで学ぶ、教える中国語のために~ 第 4 弾, 2016, 早稲田大学早稲田キャンパス (東京)
- (35) 植村麻紀子, ことばにみる中国人の思考法: 動詞や量詞の具象性を中心に, 文教大学言語文化研究所夏期講座, 2016, 文教大学越谷キャンパス (埼玉)
- (36) 植村麻紀子, 神田外語大学の多言語学習空間 MULC(Multilingual Communication Center)の活動紹介及び授業と授業外活動における実践報告, 中国語教育学会 第 1 回研究会, 2016, 早稲田大学早稲田キャンパス (東京)
- (37) 植村麻紀子, 「レシピで学ぶ翻訳のテクニック」, 中国語教育学会 第 3 回研究会 中国語教育・学習に関するワークショップ レアリアのツボ、レアリアのチカラ~レアリアで学ぶ、教える中国語のために~ 第 4 弾, 2016, 早稲田大学早稲田キャンパス (東京)
- (38) 植村麻紀子, 留学生との交流・学習の場をいかに作るか, 北星学園大学 FD, 2016, 北星学園大学 (札幌)

〔図書〕(計7件)

- (1) 西香織, 日中言語文化出版社, 『中国語の三人称代名詞“它”に関する研究』, 2019, 総 295 頁
- (2) 鈴木慶夏, 華語教学出版社, 『日本中文教学研究』, 2017, 総 219 頁
- (3) 鈴木慶夏, 朝日出版社, 『アクション! 開始!: コミュニケーション中国語』, 2017, 総 164 頁
- (4) 荒川清秀、塩山正純、周関、中西千香, 白帝社, 『キャンパスライフ中国語』改訂新版, 2017, 総 96 頁
- (5) 中西千香, 三修社, 『どンドン話せる中国語作文トレーニング』, 2016, 総 208 頁
- (6) 植村麻紀子, J リサーチ出版, 『中国語コミュニケーション』〔入門・初級〕, 2016, 総 230 頁
- (7) 依藤醇、呉川、三宅登之、加藤晴子、植村麻紀子(編), 小学館, 『中日辞典』第 3 版, 2016, 総 2225 頁

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

取得状況(計0件)

〔その他〕

ホームページ等

- (1) 「中国語コミュニケーション文法を考える」
<http://www2.itc.kansai-u.ac.jp/~ymzknk/kome/>
- (2) 「学習プロジェクトを設計するための目標分解表」
<http://www2.itc.kansai-u.ac.jp/~ymzknk/bunkai/>

6. 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名: 中西 千香
ローマ字氏名: (NAKANISHI, Chika)
所属研究機関名: 立命館大学
部局名: 法学部
職名: 准教授
研究者番号(8桁): 50548592

研究分担者氏名: 西 香織
ローマ字氏名: (NISHI, Kaori)
所属研究機関名: 北九州市立大学
部局名: 外国語学部
職名: 准教授
研究者番号(8桁): 70390367

研究分担者氏名: 植村 麻紀子
ローマ字氏名: (UEMURA, Makiko)
所属研究機関名: 神田外語大学
部局名: 外国語学部
職名: 准教授
研究者番号(8桁): 70512383

研究分担者氏名: 鈴木 慶夏
ローマ字氏名: (SUZUKI, Keika)
所属研究機関名: 神奈川大学
部局名: 外国語学部
職名: 教授
研究者番号(8桁): 80404797

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。